

【プレミア 混合スタンダード】

キャプテン 片岡裕太

•出場選手

疋田真理(東京龍舟)、片岡裕太(東京龍舟)、新田淳平(関西龍舟)、阿久根萌香(東京龍舟)、瀬並早詠(東京龍舟)、南野健一(東京龍舟)、花本遥香(関西龍舟)、花岡摩美(関西龍舟)、宮本芙美香(関西龍舟)、玉津早駿(東京龍舟)、大塚優斗(すいすい丸)、渡邊真希子(東京龍舟)、井上義章(東京龍舟)、岩井康子(東京龍舟)、坂本万美(東京龍舟)、北川由季(東京龍舟)、林志堅(東京龍舟)、近藤啓樹(東京龍舟)、新田茂雄(東京龍舟)、岩松隼人(東京龍舟)、角瑤子(関西龍舟)、野村光香(すいすい丸)、鈴木杏(すいすい丸)、上垣慎(関西龍舟)、道中靖都(東京龍舟)

•戦績

2000m (7/14)

•14 チーム中 10 位(内 2 チーム棄権)：タイム 9:24.926

(上位 8 チームのタイム)

United States 8:30.717、Canada 8:33.457、China 8:44.959、Ukraine 8:54.631、Macau China 8:55.613、Germany 8:56.630、Hong Kong China 9:02.380、Australia 9:10.422

1000m (7/16)

•予選：8 チーム中 6 位(内 1 チーム棄権)：タイム 4:32.468

•敗者復活：5 チーム中 5 位：タイム 4:24.656

(Grand Final のタイム)

United States 3:59.760、Canada 4:00.289、China 4:00.393、Ukraine 4:02.252、Germany 4:04.736、Singapore 4:09.886、Australia 4:18.304、Hong Kong China 4:18.920

200m (7/17)

•予選：5 チーム中 4 位：タイム 49.757

•敗者復活：5 チーム中 4 位：タイム 49.614

(Grand Final のタイム)

China 44.953、Canada 45.911、Macau China 46.452、United States 46.949、Germany 47.858、Ukraine 48.344、Singapore 48.466、Switzerland 49.195

500m (7/19)

•予選：8 チーム中 6 位(内 2 チーム棄権)：タイム 2:08.648

•敗者復活：5 チーム中 5 位：タイム 2:06.218

(Grand Final のタイム)

Canada 1:55.917、China 1:56.628、United States 1:57.245、Germany 1:57.632、
Singapore 1:58.948、Ukraine 2:00.262、Hong Kong China 2:01.353、Australia 2:04.776

•振り返り

総括：

長時間の移動や慣れない環境であったが体調を大きく崩す選手はおらず、ほぼ万全の状態
でレースに挑むことができた。

しかし結果としては目標としていたグランドファイナル進出は叶わず、世界との差を実感
する大会となった。

一方 200m についてはグランドファイナルまであと 1 秒という結果であったことは 1 つの
収穫と言えると思う。

他国に比べ体重の軽い日本チームの強みはスタートで前に出やすいことであり、逃げ切れ
るだけの筋力、持久力そして環境に合わせた戦略を磨き、さらなる高みを目指したい。

大会前：

今回、プレミアミックススタンダードの構成としては国内大会を経て世界選手権への出場
権を得た東京龍舟を中心に関西龍舟さん、すいすい丸さんからのメンバーを加えたものとな
った。各自の漕ぎのコンセプトを合わせる必要があったが強化合宿を通して意識統一を
図り、同時にチームビルディングを行うことができた。

2023 年パタヤ大会前にも合宿を行なったが、今回はより本番に近い環境での練習というこ
とで海の森水上競技場を使用した合宿を実施した。普段練習している東大島の環境とは違
い、正確な距離が測れることや水深が十分に深いこともあり、本番を想定した練習を実施
することができた。

大会中：

今回は宿泊ホテルからレース会場までがバスと徒歩で約 2 時間という距離にあったため、
早朝移動をせざるを得ない状況であった。さらに、パタヤ大会の時のようにレース会場で
昼食が提供されなかったため、各自で前日に購入するかレース会場の出店で調達を行なっ
ていた。

各レースについてのコメントは以下の通りである。

•2000m

12 ヶ国中先頭でのスタートとなり、他国の波を受けにくい位置でレースを行うことができ
た。

前回大会同様世界の高い壁を感じるレースとなったが、前回大会では失格により公式タイ

ムは記録されなかったものの、当時の参考タイムと比較すると、今回は約 25 秒の短縮となり、練習の成果が数字として表れたことは大きな収穫であった。

•1000m

予選の上位 2 チームのみが 1 発決勝進出、他チームは敗者復活レースに回るという中、敗者復活に回る前提でレースの組み立てを行った。レースプランとしては予選準決勝ともに概ね想定通り実施でき、スタート以降しばらくは他の艇と並ぶことができていた。しかし、中盤以降、他国のフィジカルや体力に押し負け、なかなか順位を上げることができなかった。他の距離にも共通するが、体重の軽さを活かすことでスタートは対抗できても中盤以降となると地力の差が歴然と現れる結果となった。

•200m

1000m と同じく、予選は敗者復活レースの準備という共通認識のもと、レースの組み立てを行なった。

予選ではスタート後しばらくしてから太鼓とパドラーのタイミングが大きくずれてしまうという事態が発生した。チーム内に若干の緊張が走ったが、予選終了後、すぐにミーティングを行い、原因と対策について入念に話し合うことで、同じ展開にならないよう細心の注意を払いながら次のレースに備えることができた。

迎えた敗者復活戦では予選の修正点を意識し、全員で息のあったバドリングを行うことができた。

冒頭で述べた通り、グランドファイナル進出まで 1 秒というところまで迫ることができた。足りない部分を次の大会までにしっかりと補い、目標達成を目指したい。

•500m

最終レース日かつ最も練習を積んだ距離ということで、チーム全体の集中力は最高潮であった。

レースプランとしては先日と同じく、予選は敗者復活の準備、本戦は敗者復活でグランドファイナル進出を目指すというものであった。前日の反省から太鼓とパドラーのずれはなく、想定通りの展開を作ることができた。

迎えた敗者復活レースではスタートの強度や途中の声かけの認識合わせを入念に行った。展開としてはレース中盤まではほぼ横並び、そこから各国に前にでられる形になったが、チームとしては出し切ることができた。

ただこの完成度でグランドファイナルまであと 3 秒弱と、改めて世界とのレベル差を実感するレースとなった。

最後に

本大会参加に向けてご尽力いただいた JDBA ならびに世界大会幹事の皆様に深く感謝いたしますと同時に、今後の日本ドラゴンボート界のさらなる進化を願ひまして最後の言葉とさせていただきます。

副キャプテン 新田淳平

まず初めに、大会参加にあたりご尽力いただいた JDBA、各チーム関係者の皆さまに深く感謝申し上げます。特に、選考会から合宿、大会準備、そして大会終了まで多大なるご支援をいただいた東京龍舟の皆さまに心より御礼申し上げます。

私自身、前回大会に続く 2 回目の世界選手権となったが、2 年前に痛感した世界トップレベル（グランドファイナル進出チーム）とのフィジカル面、テクニク面での差は依然大きく、力の差を改めて感じさせられる結果となった。

直近 3 大会のタイムは以下の通り。

- 2000m：19 年 9'26"362 → 23 年 dsq → 25 年 9'24"926
- 1000m：19 年 4'22"918 → 23 年 4'14"446 → 25 年 4'24"656
- 200m：19 年 49"098 (plate final) → 23 年 49"384 → 25 年 49"614
- 500m：19 年 2'00"829 (plate final) → 23 年 2'04"939 → 25 年 2'06"218

艇やレース環境等の違いもあるため単純な比較は難しいが、日本代表プレミアカテゴリとして、ここ数年で大きな成長があったと言い難い。一方、過去は大差がなかった、同じアジア圏のマカオ、シンガポール、香港は近年急速に成長しており、日本は確実に他国に後れを取っている印象を受けた。

この現実をしっかりと受け止め、今後 2 年間で何かこれまでとは異なるアプローチをしなければ、差は広まるばかりである。2 年後、今回と同様の結果に終わることは絶対に避けたい。今回の経験を通じて、「2 年間で日本代表を強化して再挑戦したい」という思いが強くなった。

現在の代表編成は、国内で代表権を獲得したチームが主導する形となっている。混合カテゴリにおいては、単一チームで代表編成するには選手層が不十分であり、混成チームでの編成が不可欠である。（混成であっても、選手層の薄さ自体は課題である。）

代表権獲得から本番まで約半年という限られた期間で、方針決定、選考、強化合宿（月一回）などを行い、チームを仕上げることの難しさを実感した。日本代表の活動と各チームの活動は、別物として明確に切り分けて考え、日本代表として独立した体制の下で、一つのチームを作り上げていくことが望ましいと考える。

また、日本代表の強化においては、JDBA の力は必要不可欠だと感じる。

代表権獲得制度の見直し、JDBA 主導の体制構築（選考会や強化合宿の実施、選手兼任ではない監督/コーチの配置など）、あるいは代表権獲得チームが主導する形がベストであっても、JDBA からの支援が可能な体制など、本気で日本代表強化のための議論と取り組みを進めていただきたいと考える。

とはいえ、強化を JDBA 任せにするつもりはない。現在の体制を考えると、代表権を争う各チーム、選手が主体的に動くことが不可欠である。世界選手権が終わり、今後は各チームおよび個人単位での活動に戻るが、各チームの競技レベルを引き上げることが、業界全体の底上げにつながると信じている。

国内チーム間には、活動環境や人数、競技方針、練習内容などに大きな差があるものの、国内での競争力強化やチーム間の情報共有などが、業界全体の底上げにつながる。各チーム内における個人間のモチベーションや練習量の差も課題であり、2 年間高いモチベーションとハードな練習を維持し続けられるかが強化のカギとなる。今大会を経験したメンバーには、今の気持ちを忘れず、それぞれのチームの中心となって周囲を巻き込み、2 年間努力し続けてくれることを強く期待している。

繰り返しになるが、「これまでと同じでは、次回も同じ結果に終わる」と感じ、「2 年間で日本代表を強化して再挑戦したい」という思いが一層強くなった。

私自身も、今大会の経験を踏まえて、2 年後に向けて何ができるかを考え、周囲の協力を得ながら、日本代表・業界全体・自チームの強化に微力ながら貢献できるよう挑戦を続けていきたい。

最後に、今大会に関わってくださったすべての関係者の皆さまに、改めて心より感謝申し上げます。

【シニア A 混合スモール】

キャプテン 下郡洋介

•出場選手

(1) 東京龍舟

吉見寿子、尾寅慎介、長谷川尚輝、江口由利子、古澤比奈子、江田育慧、大本怜依、下郡洋介、吉田圭吾、吉田希世、道中靖都

(2) すいすい丸

湯本幸一、今川昇、野世敦子、久保良子

•戦績

2000m (7 月 14 日)

•12 位 (全 14 チーム) : タイム 11:06.457

上位 8 チームのタイム

Canada 9:54.500、Poland 10:02.852、United States 10:05.516、China 10:07.345、Czech Republic 10:18.516、New Zealand 10:25.275、France 10:25.275、Panama 10:26.897

200m (7 月 18 日)

•準決勝敗退 : タイム 57.008

(Grand Final のタイム)

China 52.633、Canada 52.759、United States 53.568、Poland 53.950、New Zealand 54.080、Singapore 54.264、Great Britain 54.845、Czech Republic 54.987

500m (7 月 20 日)

•準決勝敗退 : タイム 2:29.834

(Grand Final のタイム)

Canada 2:19.831、China 2:19.858、Poland 2:21.728、Czech Republic 2:23.400
United States 2:25.028、Australia 2:25.401、New Zealand 2:25.618、Great Britain 2:26.811

•振り返り

総括 :

東京龍舟とすいすい丸の選手 15 人で、「挑戦を楽しむ姿勢」「漕ぎの統一化」「ポジティブな意見交換」を大切にチーム運営しました。通常練習に加えて合宿を実施し、回を重ねるごとに進化を実感できた半年間でした。

現地ではリザーブ・サポートに回るメンバーも全ての行動に同行し、不足の事態に備えて全員が競技に集中できました。最終日のレース後に抱き合い、涙を流す選手たちの姿を見て、大切にしていた「挑戦を楽しむ姿勢」を全力で感じる事ができたことが最高の瞬間でした。

この「挑戦を楽しむ姿勢」は「勝つ」があつてこそ一層価値が増すと考えます。私自身は2度目の世界大会挑戦になりますが、今回も世界の壁の高さを実感するレース結果でした。強い身体と高い技術向上を目指して今後も質の高い練習を積み重ねていきましょう。

各レースについてのコメント：

•2000m

スタート前の位置取りやスタートの入りはとても良かったが、中盤から力の差が少しずつ出てくるレース展開でした。慣れない BUK 艇に途中で足の置き場を入れ替える選手もあり、身体の負担も大きく感じる初戦となりました。太鼓や舵の音が届きにくい点や、BUK 艇がとても軽くて、想定していたレートよりも速く漕ぐことで艇速を上げやすいことを感じるレースだった。

•200m

予選、敗者復活戦、準決勝の3レースを実施。

レースプランとして、予選は太鼓と先頭が気持ちよく漕げる最高レートで漕ぐ。敗者復活戦は国内練習時に繰り返し練習したレートで漕ぎ、準決勝はタイムの速い方を選択することとした。

結果、国内練習よりも5〜7枚程度速いレートを準決勝で採用した。このレートの違いは艇や水深の違いによるものと推察します。レース間のミーティングで対策を立て、各々が即座に対応したが、決勝に進むことはできなかった。

•500m

予選、敗者復活戦、準決勝の3レースを実施。

500mは1カ国棄権したため、敗者復活戦の順位に関係なく、全チームが準決勝に上がれる状況であった。体力の温存も考えられる場面ではありましたが、我々は挑戦者として全てのレースに全力で挑みました。敗者復活戦で負傷者が出たため、準決勝は2名交代となりましたが、慌てずに集中したレース展開でした。しかし、決勝に進むためには3秒のタイム差があります。上記したとおり世界の壁は高いです。しかし、この壁を打破すべく質の高い練習を積み重ねていきましょう。

最後に：

JDBA ならびに大会幹事の皆様に深く感謝いたします。世界大会に参加しないメンバーも練習や合宿で多大なサポートをありがとうございました。今回一緒にチームで戦った他チームの選手も国内大会では最高のライバルです。ドイツの思い出を共有しつつ、お互い切磋琢磨して日本の競技レベルを向上していきましょう。

【シニア C オープンスモール】

キャプテン 野田哲男

•出場選手

宇井一郎 副キャプテン(東京龍舟)、野田哲男(東京龍舟)、笠川淳史(関西龍舟)、松本慎吾(関西龍舟)、畑博之(琵琶湖ドラゴン)、江端伸弘(琵琶湖ドラゴン)、檜崎修也(香港日本龍)、中澤保男(タイタム X)、有坂正和(東海ドラゴン)、坂本秀明(東京龍舟)、佐野武夫(東京龍舟)、幾石純(東京龍舟)、江口由利子(東京龍舟)、野尻恵子(東京龍舟)

•戦績

2000m (7/15)

•6 チーム中 4 位(内 1 チーム棄権)：タイム 11:15.368

(全 5 チームのタイム)

United States 10:07.333、Ukraine 10:10.413、Singapore 11:10.168、Japan 11:15.368、Spain 11:15.474

200m (7/17)

•round1：7 チーム中 5 位 タイム 57.659

•round2：7 チーム中 5 位 タイム 56.968

•round3：7 チーム中 6 位 タイム 57.940

round1-3 の合計のタイム：7 チーム中 5 位

500m (7/19)

•round1：7 チーム中 6 位 タイム 2:30.179

•round2：7 チーム中 5 位 タイム 2:29.158

•round3：7 チーム中 6 位 タイム 2:29.507

round1-3 の合計のタイム：7 チーム中 5 位

Small Senior C-open

■7/15_2000m_6 チーム中 4 位 (1 チーム棄権)

	final		diff
United States	1	10:07.333	1:08.035
Ukraine	2	10:10.413	1:04.955
Singapore	3	11:10.168	0:05.200
Japan	4	11:15.368	0:00.000
Spain	5	11:15.474	0:00.106
Germany		scr	

■7/17_200m_7 チーム中 5 位

	total		ave	ave_diff	round1		round2		round3	
Hong Kong China	1	2:44.470	0:54.823	0:02.699	1	0:54.384	1	0:54.550	1	0:55.536
Ukraine	2	2:48.544	0:56.181	0:01.341	2	0:56.127	2	0:55.814	3	0:56.603
Germany	3	2:49.296	0:56.432	0:01.090	3	0:56.242	4	0:56.522	2	0:56.532
United States	4	2:50.340	0:56.780	0:00.742	4	0:56.940	3	0:56.416	4	0:56.984
Japan	5	2:52.567	0:57.522	0:00.000	5	0:57.659	5	0:56.968	6	0:57.940
Singapore	6	2:53.376	0:57.792	0:00.270	6	0:57.860	6	0:57.632	5	0:57.884
Spain	7	3:07.543	1:02.514	0:04.992	7	1:01.148	7	1:02.717	7	1:03.678

■7/19_500m_7 チーム中 5 位

	total		ave	ave_diff	round1		round2		round3	
Ukraine	1	7:00.041	2:20.014	0:09.601	1	2:21.217	1	2:19.228	2	2:19.596
Germany	2	7:01.599	2:20.533	0:09.082	2	2:21.474	3	2:20.677	1	2:19.448
Hong Kong China	3	7:03.142	2:21.047	0:08.567	4	2:22.881	2	2:20.285	3	2:19.976
United States	4	7:04.590	2:21.530	0:08.085	3	2:22.008	4	2:21.174	4	2:21.408
Japan	5	7:28.844	2:29.615	0:00.000	6	2:30.179	5	2:29.158	6	2:29.507
Singapore	6	7:29.727	2:29.909	0:00.294	5	2:29.864	6	2:30.421	5	2:29.442
Spain	7	7:47.588	2:35.863	0:06.248	7	2:36.702	7	2:36.021	7	2:34.865

•総括:

世界選手権シニア C スモール艇(60 歳以上)カテゴリーで日本代表として初めての参戦でした。先ず、世界選手権参加にあたっては、このカテゴリーについて国内選考大会がないため日本龍舟協会並びに東京龍舟の幹部のみなさんには大変ご尽力をいただき本当にありがとうございました。改めて感謝申し上げます。そして、その期待を裏切らないようにと我々メンバーも合計 5 回の合宿と 1 年にわたる毎週末の練習に真剣にまた真摯に取り組みました。これは出場できるかまだ決まらない時からずっと続けていました。そういう背水の陣と一緒にスタートしたメンバーだったこともありチームワーク並びに練習量は万全で臨めたと思います。しかし、レース結果は、練習の成果をしっかりと発揮することができたと感じる一方、世界のレベルの高さも肌身で感じました。最初の種目の 2000m では、慣れないナロー艇に苦慮しながらも 3 位のシンガポールから僅か 5.2 秒遅れての 4 位とあと一歩メダルに届かず悔しい思いもしました。最後の 500m のねばりが足らなかったと分析しています。しかしその夜ナロー艇の漕ぎのポイントをメンバー間で共有し、以降の 200m、500m ではシンガポールの上をいく戦績を残せたことは大きな収穫だったと思います。このように戦えるレベルは保ったもののその上の世界トップレベルとの力の差はまだまだかなりあります。この選手権参加の興奮冷め止まぬうちに、以下の課題をしっかりと検証し強化に取り組めばメダル獲得も視野に入ってくると思われます。

•課題:

1)スモール、ナロー艇への対応。ナロー艇の不安定さに慣れるのに、少し時間がかかりました。今後の世界選手権がこの仕様になっていくのであれば、練習環境も整備する必要があると考えます。

2)シニア C カテゴリーの存在の周知:

当初このカテゴリー参加にあたってメンバー集めに苦労した経緯がありました。協会並びに東京龍舟にて生涯スポーツとしてのドラゴンボートをこれまで以上に宣伝してメンバーを増やしていく必要があると思います。

3)国内選考大会実施:

世界選手権はシニアの部は A(40 歳以上)、B(50 歳以上)、C(60 歳以上)と分かれているため、国内でもそれぞれの予選大会があれば、より盛りあがると考えます。

4)ロングの国内大会実施と参加:

今大会では、特に 2000m において日本代表がメダルに最も近づけたレース展開となりました。この経験を活かすためにも、国内で 2000m のレース経験を積める環境を増やすことが重要です。国内でも長距離レースを定期的に開催・参加することで、実戦感覚や戦略面の精度を高め、日本代表全体の底上げにつながると考えます。

•メンバーからの所感まとめ:

今大会を通じて、チーム内ではいくつかの共通した課題意識や学びが共有されました。

まず、スタート局面においては大きな差を感じなかったものの、中盤以降の艇の伸びや維持に課題が残るとの声が多くありました。特に欧米チームと対峙した際には、フィジカルの差が明確に現れたという実感があり、今後は筋力・体幹強化を含めた継続的なトレーニングの重要性が再認識されました。

また、世界上位を目指す上での具体的な目標タイムとして、200m で約 3 秒、500m で約 10 秒、2000m で約 60 秒の短縮が一つの目安となるという意見も出ています。こうした目標を明確にすることで、今後の強化方針にも方向性が見えてきました。

さらに、大会で使用された BUK 艇への対応力強化の必要性も挙げられました。国内での練習環境整備の一環として、協会が BUK 艇を複数保有し、各地のチームで共有できる仕組みづくりへの期待も寄せられています。

最後に、出場確定前から多くのサポートをいただいたことに対して、感謝の声も多く聞かれました。結果として、2000m では惜しくもメダルを逃し、200m では上位チームの背中が見えたレース展開となり、今後に向けた大きな刺激を得る機会となりました。